

---

# 魔導戦記リリカルなのはStratoS

杉並

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはStratos

### 【Nコード】

N2552BA

### 【作者名】

杉並

### 【あらすじ】

3年前の第2回IS世界大会モンド・グロツソ、織斑千冬は弟の一夏よりも「ブリュンヒルデ」という称号、栄誉を優先した。絶望する一夏だったが、彼は別の青年に助けられそして自らの意志で別の道を進むことを決意しこの世界を離れた。3年後に戻ってきた彼の目に自らの生まれ故郷はどのように映るのだろうか…

魔導戦記リリカルなのはStratos、始まります。

## 第1話「出会い」（前書き）

累計アクセス数が10000を超え、ストーリーの方も少しずつですが出来上がってきたので、このたび連載することを決意しました。

更新は最低でも週1のペースを崩さずにやっていけたらと思っています。

第1話は読切りと変わっていないので、すでに読んだ方は第2話からお進みください。

では、小説の方へとお進みください。

## 第1話「出会い」

結局、自らの姉は俺を助けには来なかった。彼女は9つ下の弟の命よりも「ブリュンヒルデ」という称号、榮譽を優先したのだ。

薄汚れた廃工場の柱の1つに縛り付けられながら少年は絶望した。

お前の家族は私だけだ

両親が消えた時に姉が俺に言い聞かせた言葉が思い出された。あの言葉は嘘だったのか：俺はその言葉を信じて今まで生活してきた。わがままも言わず、姉の不慣れな家事も全部担当してきた。なのに、それさえも否定されたように思えた。

そんな時だった。青白く光る閃光が壁を打ち抜き、俺の周りにいた数人の誘拐犯を吹き飛ばしたのだ。

壁を打ち抜いて廃工場の中に入ってきたのは青のラインが所々に入っていた白い服を身に纏い、両手に銃。そうはいつでも普通の銃ではなく、ロボットアニメに出てきそうな銃。を持った一人の青年。

先ほどの青白い閃光に唯一巻き込まれなかった誘拐犯がようやく我に返り、IS 打鉄<sup>うちがね</sup>を身に纏い、入ってきた青年に何か叫んだ。

当時の記憶が既にあやふやになってきていることもあってか、何と言っていたのかは詳しく覚えていないが、「何者だ貴様、止まれ！」みたいなことを言っていたのだろう。

しかし、その青年は聞く耳を持っていないのかお構いなしに歩を進める。

それに激昂した誘拐犯は近接用ブレードを展開して青年に突撃した。

ISに勝てるのはISだけ

それがこの世界の一般常識だった。そしてそのISを扱えるのは女性のみ。この場面のみを誰かが見ていたのならその誰もがISを纏った女性が勝つと信じただろう。

だが、その予想は大きく外れることになる。

その青年は右手に持っていた銃を誘拐犯に向ける。その銃口には青白い光が集まっていた。

もしこの時、誘拐犯が冷静な判断ができていれば結果は違っていた

のかもしれない。その銃口に集まっている光の色が自分の仲間を吹き飛ばした青白い閃光と同じ色であったことに気付き、とっさに回避していればあんな一瞬で終了することはなかったのかもしれない。

「???」考えもなく怒り狂って突っ込んでくるのは頭の悪い奴がやることだ。」

青年は呆れた口調でそう言い、銃の引き金を引いた。

その瞬間、銃口に集まっていた青白い光は誘拐犯に向かって解き放たれ、その言葉通りISごと誘拐犯を呑み込み、反対側の壁を打ち抜いて吹き飛ばした。

「???」「やばっ、出力抑えたはずなのに…またなのはに怒られるな。」

青年の顔はやりすぎたといった表情をしながらも俺のそばにやって来る。

「???」「ちよつと動くなよ。」

そう言いながら銃口から放出される青白い光をナイフのような形に固定して俺を縛っていたロープを切断。そして俺の頭に手を乗せて

こう言った。

「????」一人でよく頑張ったな、もう大丈夫だ。」

たった一言。けどその一言が俺の心にため込んでいた何かを一気に放出させた。少年は助けってくれた青年にしがみついて泣いた。ただ、ただ泣き続けた。

数年後、あの時どうして泣いていたのかを聞いてみると少年は恥ずかしそうにこう言った。

「あの時の俺は、多分さびしかったんだと思います。」と。

どんなに頑張っても褒めてくれる人はいなかった。運動会で1位を取っても、テストで満点を取っても誰も褒めてくれず、「取れて当然」のような反応をされてきた。ずっと姉と比較され続けてきた。だけど、ただ一人の家族である姉のため、とひたすら我慢してきた。だけど、本当は褒めてほしかった、一緒に喜んでほしかった。たった一言でいいから「頑張ったね」と言ってくれしかった。

しばらくたって俺は落ち着きを取り戻し、そしてサイレンの音が鳴っているのに気付いた。その音はだんだん大きくなっていく。こちらに向かってきているのだらうと簡単に予想できた。先ほどの爆発音を聞いて黙っている人の方が少ない。

俺を助けてくれた青年は周りの状況を理解しているのか「巻き込まれたら面倒だからさっさと帰るか」と言って去ろうとしていた。そんな彼の手をいつの間にか俺は掴んでこう言った「俺も連れて行ってください」と。

いきなり手をつかまれた彼は最初は困惑していたが、俺の目をじっと見てこういった。

??? 「俺が進んでいる道は険しくてつらい。それでもついてくる覚悟が君にはあるか？」

俺は彼のその眼を見て彼がその言葉の通り今まで非常に厳しくつらい経験を踏んで来たのだろうと感じた。その中には悲しい別れもたくさんあったのだろう。もし彼と同じ道を進めば俺も同じ経験をすることになるのかもしれない。だけど俺はこの世界を自分の目で自分の肌で自分の身で知りたいと思った。たとえどんな悲しい経験をしたとしても俺は知りたいと思った。

だから俺は「はい」と言っただけ手をギュッと握りなおした。

少年は「魔法」と出会い、自分が生きてきた世界の、そして両親失  
踪の本当の真実を知る。  
自分の世界に潜む闇を知り少年はどう思うのか。

物語はこの事件の3年後、この世界に再び少年が戻ってきたところ  
から始まる。

胸に抱くは不屈の心、その手に持つは魔導の力。  
愛機と共に立ち向かうは女性にしか扱ふ事の出来ない兵器、インフ  
イニット・ストラトス。

魔導戦記リリカルなのはStratos

青年との偶然の出会いが少年の運命を拓き、少年 高町一夏 は空  
を駆ける。

## 第1話「出会い」（後書き）

ご意見や誤字脱字等の指摘がありましたら感想の方にお問い合わせします。

オリジナルキャラクター（以降、オリキャラ）はできる限り第1話に出てきた謎の青年以外には出さないように進めていく予定です。

（オリキャラを出しすぎると読みにくくなりそうなので…）

それでは第2話でまたお会いしましょう。

## 第2話「入学」(前書き)

お待たせしました、記念すべき連載第2話です。

今回の物語はISの世界を軸として、その世界になのはのメンバーが関与していくといった話にする予定です。

第2話では、なのはの主要メンバーがほんのちょっとだけ出てくる  
…かも。

## 第2話「入学」

一夏「(∴いくらセシルが同じクラスにいるからってこの状況はさすがにきつい。)」

俺以外のクラス全員∴というよりもこの学園に通う生徒は俺以外全員女子生徒。学園職員も用務員に成りすましている本当の学園長を除いて全員女性。それに加えて座席が最前列と真ん中というクラスほぼ全員からの視線を集める絶好の位置。まさに四面楚歌。

一夏「(藍越学園で学生をしながらこの世界の状況について調べてくるのが今回の俺の任務の目的だったのに、よりによって座標ミスって転送位置がズレただけじゃなく、飛ばされた場所に置いてあったISに触れて起動させちまうなんてな∴マジで情けない)」

ちなみにそのことをみんなに話したら「いやいやさすがにそれはないでしょ」って顔された。太一さんとタヌキ(はやて)さんについては大爆笑。

俺はあの時ほど「穴があったら入りたい」と思ったことはない。

一夏「(しかもそのせいで世界で初めてISを動かした男という立場からISを調べてこいっていう追加任務まで課せられるなんて∴鬱だ。)」

「はあっ」と大きなため息をつく。しかし、何事も前向きに考えるという持ち前の性格ですぐさま気持ちをあらため、この3年間で習得した並列処理を活かして現時点で発生している問題とその解決策について考えていく。

一夏「まあ、起きてしまったことはしょうがないとしてこれからどうするかだな。国籍についてはイギリス政府の努力もあって自由国籍権を取得できたけど今後どうするのかを考えていかないといけない。ISの情報収集についてはこの学園に入学したことで藍越学園にいる場合よりも洗練された情報が入手できる、ISがどうして俺に反応したのかについては実際にISに乗って調べてみないとわからない、それから俺の機体は…」

並列処理は一般的な魔導師で3つか4つ程度しかできない。これは人間の脳が与えられた情報を処理する能力に限界があるためだが、一夏はそれを最大15個まで並行して考えることが出来る。現在並行して考えている情報は10個、あと5つ考えることが出来る点を考慮すれば脳への負荷はそれ程大きくはない。だが一夏は8個以上の情報を並行して考える時、脳への負荷を小さくしようとして思考のみに意識を集中させてしまうという癖があった。

だからだろう、教室に副担任が入ってきて自己紹介したのにも、クラスメイトの自己紹介が始まったのにも気づかなかったのは…

???「…ちかくん、高町一夏くんっ」

一夏「へっ、あっはい。」

下に向けていた顔を上にあげると副担任の…確か山田先生（下の名前は忘れた）が机の前まで来て俺の名前を呼んでいること、そしてまたいつもの悪い癖が出ていたことに気付く。どうやら自己紹介が始まっていて俺の順番まで進んできていたらしい。セシルの方をチラリと見ると「またですか、もう。」といった顔をしている。

山田先生「あつあの、お、大声出しちゃってゴメンね。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、本当にゴメンね！でもね、あのね、自己紹介が、『あ』から始まって今『た』の高町くんの番なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？それともやっぱり、だ、ダメかな？」

目の前で山田先生が今にも泣きそうな声で頭をぺこぺこ下げてお願いしていた。

一夏「あ、ちょっと考え事していただけなので怒ってませんし、そんなに謝らないでください。自己紹介もちゃんとしますから、先生落ち着いてください。」

山田先生「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

…本当にこの人は教師なのだろうか、という疑問を持ちながらも一夏は立ち上がり、後ろを振り向く。今まで背中に感じていた視線を今度は正面から浴びる格好。

一夏「（なのは姉も教導の際にこんな感じでいろんな視線を浴びてたんだな…）」

自分の義姉のなのはが教導官として多くの魔導師の前に立った際に浴びる視線に近いものを自分も浴びていることに気付き、一瞬しみじみとした思いになりながらも気持ちを引き締めてこう言った。

一夏「初めまして、イチカ・タカマチです。日本生まれのイギリス人でしたが、現在は様々な国の思惑のせいで自由国籍権を取得し、所属は決まっていない状況にあります。変に馴れ馴れしく接すると

「国際問題になりかねないのでその点にはみなさん注意してください。」

## 第2話「入学」（後書き）

ということと第2話でした。いかがだったでしょうか。これからもコツコツと話を進めていく予定ですので、今後も宜しく願います。

ご意見、ご感想、誤字・脱字等につきましては感想の方をお願いします。

次回、第3話「再会」

一夏はこの学園で会いたくなかった人と3年ぶりの再会を果たす。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2552ba/>

---

魔導戦記リリカルなのはStratoS

2012年1月6日17時54分発行